

このように軍功によって地位を高めた堯氏一族であったが、堯雄・堯奮はいずれも北齊成立を待たずに亡くなってしまふ。ただし彼の母である「趙胡仁墓誌」をみると、彼らの死後、高歡が主導して「標賞」が行われ、母には南陽郡君が、堯峻には主衣都統が授けられたことが明らかとなる。特に後者の官は、皇帝や権力者の家政を担うことで政權に深く関与した「君主家政官」である。こうした施策によって、北齊一代における堯氏一族の家門の継続が可能となり、「四美冢」の營造に繋がったのである。

（Ⅱ）殷周金文辨偽新考

山本 堯（公益財団法人泉屋博古館学芸員）

殷周金文が先秦史研究のうえで最重要の史料群であることは周知の通りだが、青銅器上に鑄込まれた文字ゆえに、史料批判を行ううえでは鑄造技術への理解が必要不可欠となる。殷周金文の製作技法は長らく未解明とされ、このことに起因して、殷周金文の史料批判を行っていくうえでの基本的な方法論は、十分に確立しているとは言い難い状況にある。

こうした現状に鑑み、発表者は芦屋釜の里と共同で殷周金文の復元鑄造を行い、新たに金文鑄造法の仮説を提唱、実験によってこれを検証した。発表者らが提唱した仮説は以下の通り。石膏を含有する土を使用して外型を製作、内部に土を込めて中子を起こし、一定の厚みを削り取る「削り中子」の技法で成形する。さらに中子上に一定の深さの掘り込みスペースを設け、その曲率にあわせて半乾燥の文字プレートを起こす。プレートを焼成した後、筆に泥漿を含ませてプレート上に反転文字の形状を塗り重ね、凸線文字を起こす。文字プレートを中子上に嵌め込み、外型と組み合わせて鑄造する。

以上の鑄造実験の結果を踏まえ、鑄造技術の観点からこれまで殷周金文の辨偽をめぐって行われてきた議論に再検証を加えた。これまで文字学や歴史学の分野で重視されてきたのは、青銅器に見られる型持（スペーサー）の痕跡であり、これの有無によって真贋を判定するという説が支持されてきたが、こうした方法の成り立ち難いことを指摘し、単一の要素の着目するのではなく、様々な観点から総合的に辨偽を行う必要性を説いた。

さらには長年真贋の議論があった散氏盤（矢人盤）を取り上げ、器制・紋様・鑄造技術・銘文などから多角的に検討を加え、後世の偽作の可能性を排除できないことを指摘した。ただし、このことは散氏盤銘の史料的価値を全面的に否定するものではなく、銘文内容に関しては下敷きとなる史料の存在が推測される一方、字形に関しては後世の偽刻による影響を考慮せざるを得ないと考えられる。このように、単に史料の真贋判定のみを目的とする「骨董商的」な辨偽を脱却し、その史料で「何をどこまで言えるのか」を線引きする史料批判としての辨偽を確立する必要がある、そのためには様々な専門分野からの複眼的検討が必要不可欠であることを最後に述べた。

(Ⅲ) 漢“剛卯”“嚴卯”新考

于 淼（揚州大學文學院講師）

剛卯、嚴卯是流行於漢代的辟邪佩飾，最晚在西漢已經開始流行。關於漢剛卯的銘文見於《漢書》和《後漢書》的注解中，清代的圖錄中或著錄了一些銘文摹本或拓本。傳世的漢剛卯數量不少，但真偽雜存。近年來考古發現中也出現了一些玉質和木質剛卯。本文梳理了漢剛卯、嚴卯的著錄情況，以考古發掘品為主，結合部分館藏品，對漢剛卯、嚴卯的形製、銘文和性質進行了整理和考證。漢剛卯、嚴卯因材質不同而大小不同，相同材質的剛卯、嚴卯大小相當。玉質剛卯長約合漢代的一寸，而木質剛卯體積約為玉質剛卯的一半。銘文釋讀方面，應該將剛卯、嚴卯的銘文結合起來進行理解。剛卯首句“正月剛卯”與嚴卯首句“疾日嚴卯”合起來表示一個日期，為“正月疾日”。剛卯的“靈爻四方。赤青白黃，四色是當”以及嚴卯的“化茲靈爻。既正既直，既觚既方”都是對其外形和特質進行的說明。“靈爻”應是兩者合在一起的自名。剛卯的“帝令祝融，以教夔龍”以及嚴卯的“帝令變化。慎爾固伏”指的都是帝的命令以及夔龍的順服。雖然語言順序不同，但是可以相互補充。剛卯、嚴卯的最後一句話，目前的釋讀都讀作“庶疫剛瘴，莫我敢當。”我們認為所謂“庶疫”其實是“尺蠖”和“赤疫”兩個詞的誤寫。剛卯、嚴卯上的字體因書寫載體的不同而不同，不應以“爻書”一概而論，剛卯、嚴卯銘文應屬祝由辭，原本應與驅疫行為有關，而逐漸演變為佩飾。

《特別寄稿》

2020 年度中国出土資料学会大会参加記

崎川 隆（吉林大学古籍研究所教授）

2020 年 12 月 12 日、中国出土資料学会の 2020 年度大会が、折からのコロナ肺炎流行という特殊事情をうけて、ウェブ会議システムの Zoom を用いたオンライン形式により開催された。筆者は、もとより本学会の会員ではないが、発表者の于淼氏のご紹介と会務各位のご好意によって、会議を傍聴する貴重な機会を与えられた。会后、会報委員の戸内氏から、“参加記”的な小文の執筆を依頼された。当初は単なる傍聴者の立場でそのような文章を書くことにためらいを感じたものの、傍聴をお許し頂いた手前、また中国の大学に勤務する邦人研究者という、やや特殊な立場からの印象を語ってほしいというご要望もあり、執筆を快くお引き受けすることにした次第である。

上述の如く、今回の大会は、これまでに行われたことのない“ウェブ会議”という形式によって開催されることになったが、すでに“コロナ禍”が始まって一年近い時間が経ち、オンライン形式での研究・教育活動が広く一般に浸透していたという事情もあり、議程は滞りなくきわめてスムーズに進行した。また会前の準備も、半年以上まえからシステムの動作確認、バックアップ回線の確保等の作業が周到に行われていたようであり、中国・揚州大学から参加した于淼氏によれば、「これほど入念に準備が行われれば、万に一つも間違いの起こりようがない」と思われるほどであったという。

コロナ禍以降、中国の大学、学会においても同様にオンライン形式での会議、授業、講演、面接、口頭試問等が行われている。最も多く使用されるのは“騰迅会議”というシステムで、その使用

法と機能は基本的に Zoom と大差ない。ただ、一つ特徴的なのは、学術講演や学会等、広く一般に公開されるイベントにおいては、参加・視聴に際して“事前申し込み制”を採用することがきわめて少ないという点である。これは、中国においては、参加・視聴者数がしばしば 1000 人を超えるような規模に膨れ上がる場合があることや、プライバシーや著作権・肖像権等に対する感覚の違いに起因する問題であるとも考えられるから、一概にその優劣を判じ難いが、中国のオンライン会議等で報告を行なう場合には、不特定多数の中国の聴衆に向かって、リアルタイムで発言をしているという強い自覚をもつことが求められる。また、日本の場合、あくまで自主規制ベースではあっても、録画・録音・スクリーンショット等の行為が禁止されていることが多いが、中国の場合、そういった規制は皆無であることが多く、場合によっては、“騰迅会議”上で行われている会議が、ほぼリアルタイムで、“bilibili.com”等のきわめて影響力の大きい動画サイトで一般に公開されてしまっていることもあるので、個人情報や未公開情報等の保護にも十分な注意を払う必要がある。さらには、本来は非公開のはずのレジュメ集等が、会議開催前の段階で、すでに有力な SNS（いわゆる“微刊”等）に拡散されてしまっているようなケースも珍しくないもので、万一そういった事態に遭遇しても、決してうろたえないだけの心の準備をしておきたい。中国の学者の場合、もともと発言の公私を明確に分けるという習慣が身につけているためか、完全公開のオンライン会議においても、それほど問題が頻発しているようには見受けられない。ただ、しばらく前に、さる高名な学者が、数千人規模の参加者が視聴するオンライン講演会の質疑応答のくだりで、うっかりご自分の携帯番号を公表してしまうという一幕があり、さすがにこの時ばかりは司会者の顔にも焦りの表情がよぎっていた。

さて、今次の大会における田熊、山本、于三氏のご報告は、それぞれ大変興味深いもので、各氏とも PPT を用いて複雑な問題を簡潔にまとめ、わかりやすく議論を展開していた。また各氏のご発表中、さすがに周到な準備を重ねられただけあって回線の乱れ等の技術的な問題はほとんど発生せず、司会の小寺氏の要領を得た仕切りぶりも相俟って、初めてとは思えないほど円滑に議程は進行した。

于森氏発表後の質疑応答では、海老根氏が同時通訳を担当され、チャット機能と音声の二方向から矢継ぎ早に発せられる質問を、落ちついて的確に訳されていたのが大変印象的であった。同時通訳というのは、その求められる技能の高さや心理的重圧に比して報われるところの少ない仕事と言われるが、この困難な任務を敢えてひきうけ、しかも見事に果たされた氏には、心からの敬意を表したい。

今回はウェブ会議システムを用いての開催ということで、発表者への質問は、多くの方がチャット機能を用い、文字入力で行っていた（中国のウェブ会議上においては、参加人数が多いためか、一般的に音声による質問は受けつけず、司会者が文字チャット中から代表的な質問をセレクトする、という方式を採用するが多い）。音声による質問も許されていたようであったが、私は多少の遠慮もあって、敢えて文字チャットのみで質問を行ったが、議論が白熱するに従って、普段あまり使い慣れていない日本語入力の文字変換速度が追いつかなくなり、制限時間内に論を尽くせなかったことが、少々心残りだった。もし対面式の会議であれば、茶歇や会後の懇親会等の機会を利用して、さらに踏み込んだ議論を交わすことができただろうと思うと、この時ばかりはウェブ

会議の不便さを憾みに感ぜずにはいられなかった。だが、そもそもウェブ会議形式でなければ報告を聞くことすら叶わなかったことを思えば、この憾みが高望みに過ぎないことは言うまでもない。

最後に、今回の大会を通して得られた“ウェブ会議”の経験を、コロナ終熄後においてどのように活かしてゆくべきかという問題について私見を述べたい。すでに多くの議論があるように、対面式とウェブ式にはそれぞれに長短があり、その優劣は一概に決めがたいが、私個人の意見としては、やはり両者の長所を折衷した“対面—ウェブ併用式”こそが最も理想的な方式であると考えている。2020年秋、中国河南省開封市で開催された中国古文字研究会の大会ではこの“併用方式”が採用され、海外からも含めて約1000人の参加者を集めるといった過去最大規模の大会となった。もちろん、やみくもに多くの参加者を集めればよいというわけではないが、より多くの参加希望者に視聴・討議の機会を提供しえたという意味では、評価に値すると思う。今後、もし日本の学術界においても、こうした“併用式”の大会が一般化してゆくなれば、海外在住の研究者としては、これに過ぎる喜びはない。

以上、とりとめのない感想を記して“参加記”に代えたい。

《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 2020年度第1回大会（総74回）が、2020年12月12日（土）にオンラインで開催されました。なお、当初2020年7月4日（土）に成城大学で開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により、延期となりました。

○会報委員会より

(1) これまで会報（年2回発行）は国内会員等に対して郵送して参りましたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により当面の発送作業が困難なこと、また中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、今年度からはこれを学会ホームページにおいて公開し、郵送は取りやめることといたします（2020年7月5日開催の2020年度第1回理事会における決定事項）。なお、発行回数や掲載内容等については特段の変更点はございません。会員の皆さまにはたいへんご不便をおかけいたしますが、何とぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなど、引き続き広くお読みいただけるような工夫をして参りたいと思います。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ぜひこの機会にご登録ください。

(2) 2012年7月21日に開催された臨時総会において、「中国出土資料學會著作権規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第46号（2011年3月発行）から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年二回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料學會會報』は、新しい学術情報

をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様様、学会参加記、新刊紹介など、広く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を停止し、当面下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

- ・ご投稿の際は、メール(宛先: office@shutsudo.jp)で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。
- ・ファイル形式は、WORD(～.docx または、～.doc)形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。
- ・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。
- ・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されないのであれば、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第26号の締切について

2010年度大会(2011年7月16日開催)および2011年度大会(2012年3月10日開催)にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第26号の投稿締切日は、2021年12月末日です。ふるってご寄稿下さいませよう、お願い申し上げます。

(3) 『中国出土資料研究』の奥付について

機関誌では、その奥付記載発行日と実際の出版日との間のずれが大きいことに由来する問題が生じておりました。そこで、第20号からはその日付を一致させることになりました。最新第25号の奥付は2021年7月発行となっております。

○事務局より

(1) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、事務局では従来通りの作業が困難になっております。この状況に鑑み、大会案内等紙媒体の送付を当面停止し、学会ウェブサイトとメールでご連絡することといたしました。皆様には大変なご不便をお掛けして誠に恐縮ですが、どうぞお許しいただきますようお願い申し上げます。

(2) 年会費は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号: 00180-5-13124 受取人: 中国出土資料学会
なお会費は、 通常会員・準会員 年額4000円
 学生会員・海外会員 年額2000円 です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

office@shutsudo.jp